2024年6月9日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

え、私がキリストの香り？

［コリントの信徒への手紙二2章12～17節］

「わたしは、キリストの福音を伝えるためにトロアスに行ったとき、主によってわたしのために門が開かれていましたが、兄弟テトスに会えなかったので、不安の心を抱いたまま人々に別れを告げて、マケドニア州に出発しました。

神に感謝します。神は、わたしたちをいつもキリストの勝利の行進に連ならせ、わたしたちを通じて至るところに、キリストを知るという知識の香りを漂わせてくださいます。救いの道をたどる者にとっても、滅びの道をたどる者にとっても、わたしたちはキリストによって神に献げられる良い香りです。滅びる者には死から死に至らせる香りであり、救われる者には命から命に至らせる香りです。このような務めにだれがふさわしいでしょうか。わたしたちは、多くの人々のように神の言葉を売り物にせず、誠実に、また神に属する者として、神の御前でキリストに結ばれて語っています。」

[1]　パウロと「涙の書簡」

 今日は、「え、私がキリストの香？」という題を付けさせて頂きました。神様が私たちのことをそのように言って下さる、ということなのですが、どこか私たちは「私はとてもそうではないな…」と謙遜的にと言ったらよいでしょうか、そう思ってしまうところがあると思います。そのことについて一緒に考えてみたいと思ったのです。

　けれどもその前に、2章12～13節の部分について少々説明をしておいた方が良いかと思いましたので、お話させて頂きますと、ここにはこのような背景があったようです。宛先はギリシアのコリントの教会です。使徒パウロが開拓した教会と言って良いと思います。ところがその教会内部で、これまでもお話してきましたように様々な問題が発生してきた訳です。仲間割れや、社会的弱者への見下し、また道徳的不品行の問題や、信仰の不一致と言った事柄がパウロの耳に届いていました。パウロはとても心を痛めました。そして、彼は離れた場所にいるのですが、祈りながら手紙を書きました。それは、コリントの信徒への手紙一、二という形で残されていますけれども、それ以外にも手紙を送ったようなのです。

2章4節にこうあります。―「わたしは、悩みと愁いに満ちた心で、涙ながらに手紙を書きました。あなたがたを悲しませるためではなく、わたしがあなたがたに対してあふれるほど抱いている愛を知ってもらうためでした」。「涙ながらに書いた」ということから「涙の書簡」と呼ばれているようですが、どうもこの手紙は発見されていないということのようです。しかしパウロはその手紙を受けた教会の人々の人々が気掛かりで仕方がなかったのです。そこで、ギリシア生まれの親しいテトスをコリント教会に送り、様子を教えて貰うため、彼と落ち合うためにトロアスで待っていたのですが、彼の帰りが遅くなるうちにマケドニアに伝道する道が開かれたので、心が落ち着かないまま出発したという背景がありました。それが2：12～13です。ですから牧会者パウロの気持ちは、あの手紙で書いた事柄が真の悔い改めに繋がる方向になれば良いけれど、逆に反発を招くことも有り得るのでなかなか辛いものがあったと想像できます。人間の交わりというものは、そう理想的には進まないというのは、この初めの教会の時からそうだったのですね。

[2] イエス様の香りの中に溶かし込んで下さる

 しかし、パウロは14節以下で、神様に感謝の言葉を語っています。「神に感謝します」という言葉から始まっていますけれども、新改訳聖書では「しかし」という言葉が頭に付いていまして、その方が繋がりが良く分かります。パウロは心が落ち着かないのです。「しかし」、「神に感謝します。神は、わたしたちをいつもキリストの勝利の行進に連ならせ、わたしたちを通じて至るところに、キリストを知るという知識の香りを漂わせてくださいます。救いの道をたどる者にとっても、滅びの道をたどる者にとっても、わたしたちはキリストによって神に献げられる良い香りです。滅びる者には死から死に至らせる香りであり、救われる者には命から命に至らせる香りです。」

　ここで印象的な言葉は、「香り」という言葉です。パウロはこれを、「キリストの勝利の行進」というイメージと重ね合わせて用いています。当時、ローマの軍隊が戦勝パレードをする時、捕らえられた者たちも一緒に引き連れられていました。そして、そのパレードには芳ばしい香が焚かれて、それは周りの者たちに何か勝利の一体感を感じさせる演出でもありました。そして周りの者たちは歓声を上げたり、興奮するわけですよね。しかし、ここでパウロはそのような例えを用いながら、私たちも決定的なキリストの勝利につなげられているのだ、ということを述べているように思います。考えてみたら、私たちは神を、キリストを無視し、おのれを神にして生きているような者でした。そんな者を、主イエス様は滅ぼすどころか、むしろ、「これらの小さき者の一人でも滅びることは父のみこころではない」（マタイ18:14）と、私たちの身代わりとなって、十字架において、ご自分を神様への供え物そのものとなって下さいました。そして、私たちをサタンの支配下に渡すことなく、‟ご自身のもの”としてしっかりと捕らえて下さったのです。私たちは言ってみれば、イエス・キリストの「捕らわれ人」・「捕虜」です。サタンはもう手を出すことが許されないのです。だから、私たちを勝利の凱旋パレードに引き入れて下さる。ただ主イエスの贖いの御業のおかげの故です！

　「神は、わたしたちをいつもキリストの勝利の行進に連ならせ、わたしたちを通じて至るところに、キリストを知るという知識の香りを漂わせてくださいます」とありました。「わたしたちを通じて」「キリストを知らせる香り」が漂う、と聞くと、私たちは正直、そんなの無理とか、自分にはとてもおこがましい！と思ってしまうかもしれませんね。…でもここの所で、パウロは「一生懸命にキリストの香りを放ちなさい」「努力しなさい」と言っているのではないのですね。「もうあなたはキリストの香りを放っている」ということを言っているだと思います。

私たち、良い香り、とはどういう香りを思うでしょうか？「香水」というのもありますけれども、あれは自然ではないですよね。むしろ匂いを消す為であったり、趣味性が強いと言えるのかも知れませんが、本当に良い香りというのはフルーツだったり、花や野菜の香りだったり、新緑の匂いであったり…。天日干しした布団なども太陽を感じる良い匂いですよね。或は、犬や猫の肉球の匂いが好き、という人もいると思います。これらは‟存在”の香りです。作った香りじゃない。香りも神様の創造物でしょう。私は、子どもがまだ小さかった時、幼稚園とかから汗をかいて帰ってくる、あの汗の匂いっていうのも、酸っぱいような匂いですけれども、とても愛おしく思いましたよね。生きているからこその匂い。生身の、幽霊ではない存在の私たちは、否が応でも匂うんです。生きているから当たり前です。そして、神様は、そんな私たちの匂いも全部引き受けて下さって、イエス様の香りの中に溶かし込んで下さるのではないでしょうか。罪赦され、主がご自分のものとされた私たちからは、私たちの内に聖霊が住んで下さっているのですから、主の香り、キリストの香りが至る所に放たれていると捉えて良いと思うのです。

[3] 私たちを神様に献げられる香りとして

そしてこの香りというのは、また、神様への献げ物として立ち上る香りなのだと思いました。旧約の献げ物の動物のように。私たちは最期、灰になります。私は思ったのですが、私たちの体が灰になる時、それは、神様が、完全に無力になった私たち、献げられた私たちを、本当に迎え入れて下さる時なのかもしれないなと今回思いました。それ迄の間、私たちは、神様との関係、イエス様との関係を親しくして行くことが出来たらどんなに幸いだろうかと思います。

先々月の4月の終わりに95歳で召された、加藤常昭先生（日本基督教団・鎌倉雪ノ下教会元牧師）が、確かFEBCの番組の中で話されていたことのように思うのですが、まだお若い時のこととしてこのようなことをお話されていたのです。 ―「（地方の教会だったでしょうか）、ある高齢の信徒のご夫妻の家を訪ねて行くことが時々あったのですが、お二人は、本当に静かに聖書を読む時間を大切にされていました。いつも祈っておられることも伝わってきました。私はとてもかなわないなぁと思いました」と。加藤常昭先生は、現代日本で最も著名な神学者・伝道者であった方です。その方に「かなわないなぁ」と言わせた、いつも聖書に聴き、祈る生活をされた、普通のご高齢のご夫妻です。そして思います。この家には、お二人の人生を歩みを通してのキリストの香りが満ちていたのだと。それを客観的に測ることは出来ませんね。でも‟空気”ってやはり自ずと造られるのではないでしょうか。私たち自身もやはりそうだし、教会もそうですよね。

―「救いの道をたどる者にとっても、滅びの道をたどる者にとっても、わたしたちはキリストによって神に献げられる良い香りです。滅びる者には死から死に至らせる香りであり、救われる者には命から命に至らせる香りです」。‟教会”という所は、ある意味、恐い所なのだと思います。横との繋がり（水平の関係）だけで生きている私たちに、言わば、目に見えない神様との関係（垂直の関係）を問われる所だからです。「あなたにとって、神様とは、キリストとは誰か。そのつながりに生きているか」と。でも、それはいつも申し上げるように、私たちを打ち叩くものではなく、本当に大きな救いへの招きです。私たちの教会で醸し出される「キリストの香り」が、集まる人々を命から命に至らせる麗しい香りでありますように。ご一緒に、「主よ、私を探り、私を造り変えて下さい」と祈りながら、これからも感謝と讃美の心を込めて礼拝を捧げて行きましょう。お祈り致します。

主イエス・キリストよ、あなたはご自分を、父なる神様への香りの良い供え物として献げて下さり、私たちの救いを全うして下さいました。本当に畏れ多いことですが、そうでなければ私たちと神様とのつながりは回復されなかったことを思います。そしてあなたは、私たちも、十字架と復活の出来事を通し、私たちの人生を、キリストの香りを放つ存在として聖霊によって造りかえ、執り成し、日々感謝と讃美を携えて生きることが出来る者として下さいました。ありがとうございます。どうか、私たちは罪多き者ですが、救いの喜びを日々新しくして下さって、自然と周りの者たちにあなたを証し出来る者として下さい。また教会をそのように導いて下さい。主の御名によって祈ります。アーメン。